

■学校経営のポイント

「分からない」が学びの種になる

喜名 朝博

「身の上に心配ある参上」(みのうえにしんぱいあるさんじょう: $4\pi r^3/3$)、中学時代に覚えた球の体積を求める公式だ。球とその球がぴったり入る円柱の体積比が2対3になることから導き出されたものだったが、なぜ2対3となるのかまでは詳しく教わらなかった。

そして、高校で積分を学び、見事に公式が導かれたことに感動した。「微積はすごい」と思ったものだ。

今、分からなくても分かるときが来る

学校は、子どもたちが「分かる」ことを目指している。「分からないことを分かるようにする」のが学校であるとも言える。

しかし、「今は分からないこと」でも、学習経験や語彙、概念のストックが増えることで、過去の学びを突然理解する瞬間がある。「分かる」ための時間は子どもによって異なるのだ。

「分からないことがある」ことを理解し、「分からない」を許容できる環境が、探究心や挑戦意欲を支えていく。そして、「分からない」を恥じない学級文化は、心理的安全性を高めることで醸成されていく。

「分かった？」は、学びを止める

教師の「分かった？」に、正直に「分かりません」と言える子はいのだろうか。教師の「分かった？」は、教師自身を安心させているだけである。

子どもによって分かり方が異なり、誰にもでも分からないことがあることを前提に、「ここまでで分からないのはどこ？」と問いかければ、子どもたちは安心して振り返ることができるだろう。学級の心理的安全性をつくるのは、教師の言葉や態度なのだ。教師の「分かった？」は、学びを止める言葉にもなる。

「分かる」には段階がある

「分かる」には段階があり、様々に分類されている。たとえば、計算のやり方を覚えて正解できるといった操作的理解。筆算の仕組みを言語化できる概念的理解。筆算と数の仕組みと図や式がつながる構造的理解。さらにその仕組みを文章題や生活場面などで、自ら判断して使えるようになる転移的理解。

そして、別の計算方法はないか、もっと効率的にできないかを考える探究的理解などは、探究心の根源となる。

そもそも教師は、子どもたちにどの段階の「分かる」を求めているのだろうか。

「分からない」に気づくこと

「分かる」ことばかりを目指すと、子どもたちは「分からないこと」はよくないことだと思うようになる。すると「分かったふり」をしたり、「分かったつもり」になったりしてしまうのだ。この「ふり」や「つもり」が学びを止める。学力低下の要因の一つがここにあるのではないだろうか。

全てを理解することを求めず、「何が分からないのかを分かる」ことを大切にしたい。論語の「知らざるを知らずと為す、これ知るなり」や、ソクラテスの「無知の知」は、「分からない」が学びの芽になることを示している。学力とメタ認知力は相関するのだ。

「学びの種」をしまっておく

自分の分かり方の程度をメタ認知し、今は分からなくても、そういうものだと折り合いをつけておくことも重要だ。「今は分からなくても、必ず『そういうことか！』と分かるときが来るよ」と教師が語ることが、子どもたちを安心させる。

そして、それを「学びの種」として記憶の中にしまっておくことがポイントになる。

(きな・ともひろ=国士舘大学客員教授/元全国連合小学校長会長)

教師が安心して働ける学校づくりのために (好評発売中!)

こころが折れない職員室

【著】大石智 / 四六判 / 定価 2,420 円

本の詳細およびご予約は、右QRコードより小社ホームページをご利用ください。

